
雨がやむとき

福本勝美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨がやむとき

【Zコード】

Z0744A

【作者名】

福本勝美

【あらすじ】

春、僕は彼女に会った。250ccのオートバイで遠い能登から
来た笑顔の可愛い彼女。美しい春の琵琶湖で僕らは恋に落ちた。土
の香りが沸き立つ五月の日、まるであざやかな躊躇の花のように彼
女は光輝いていた。

第一部

その日、まだ暗い名神高速を、僕は西宮から大津へ向かって走っていた。

5月とはいえ明け方前はまだ寒く、吹きつける風が身震いするほど冷たかった。

それは僕が、カワサキの1000ccで名神高速の追い越し車線を飛ばしているからでも

あつた。

僕は仕事の時はたまに自動車に乗る時もあつたが、バイクというのが好きだった。

もう十五年か十六年、ツーリングだの、散歩だの言つてはあちらこちらを走りに行つたりして。空気は壁のように僕を押し戻そうとし、ヘルメットの表面を流れていく風はあるでうなり声をあげるように低い音を響かせながら後ろへ流れてゆく。タイヤはアスファ

ルトを蹴り、暗い闇を切り裂くように遅い大型トラックを次々に追い越していく。まるで

風に乗つて空を飛んでいるような、そんな感覚が好きだった。

高速道路のオレンジ色のランプはカワサキの青い塗装を、深い紫色に見せていた。

天氣も申し分なかつた。もう少し着込んで来ていればよかつただろう。

カワサキは天王山トンネルを潜り抜け、京都へ向かう坂を登つていつた。空は暗いが、かすかに朝の匂いがした。

夜が明け始めるまでまだ一時間はある。暖かさ本番となつた晴れの土日だから多くの車が

出てくるに違いない。たくさんの中が名神高速を利用するだらう。

僕は京都付近の渋滞に

巻き込まれないうちに大津まで到着しようと思つていた。そしてハンドルに取り付けた腕時計を見て時間を計算していた。予定では、大津SAで小休止を取り、琵琶湖の東を北上する。それから北陸道へ入つてすぐの賤ヶ岳SAまで行く。彼女は夜中から250ccのヤマハで能登半島の内浦といふところから、南下コースを走つていて。計算どおりならば、お互に待たずに琵琶湖の北で落ち合えるはずだ。

どんな子なんだろうと思つた。前日の夕方初めて電話で話をしたが、明るくて楽しそうな子だった。彼女はある日、僕が開いているページを見てメールを送ってきた。お互いバイクが好きだから、ツーリングの話をたくさんメールで交換したものだった。まあそういつ話をしているうちに一緒に走りことになつたのだ。僕は、日本海沿岸は加賀より北へは行つた事がなかつた。いつも走るのは四国や九州方面だつた。東北や北海道にも行つたことがあつたが、なぜか北陸といふところだけは、僕の中で寒くて暗いというイメージがあつたせいかそれまで行つたことがなかつた。

彼女はまだ経験が浅いといふこともあって、いつも能登半島を走つていて、いちばんの遠出は金沢だという話を聞いていた。

一緒に走ろうという話になつたとき、僕は能登まで行くと言つた。しかし、彼女は自分も

走るのだと言い、春の琵琶湖へ行きたいと言つた。そしてツーリン

グに行くことになった
というわけだ。

僕が住む芦屋から琵琶湖は近い。自分の庭みたいなものだから年に数回は走りに行つてい

た。しかし彼女にとつては大冒険だつただろつ。初めての遠出、そして初めての高速道路。

彼女がバイクの他に乗れる乗り物は自転車だけだった。きっとその頃は大きなトレーラー

が走つている真つ暗な北陸道を、小さなヤマハでびくびくしながら南へ向かっていたのだ
うう。

結局大津SAには予定より20分も早く着いた。僕はいつものように給油をし、暖かい缶

コーヒーを買って、タンクバッグに入れてある地図を見ていた。

予定どおりなら僕は、いつたん敦賀まで行き、Uターンして彼女と待ち合わせている南下

方面の戻ヶ岳SAへ向かう。彼女がもしまちがつてSAへ入りそこのたとしても、長浜か

多賀あたりで捕まえようつと思つた。「小松を過ぎました」と言つメ

ールが来ていた。とい

う事はだいたいプランどおりに進んでいるということだと思つた。

僕は高速道路の位置関

係をしつかりと頭に入れておいた。

空が明るくなつてきた。先ほどまで暗かった空が、やがて藍色に変わり、コバルトブルーになつた。

東の空はさらりと明るい朝焼けの空で、うすすらと赤みを帯びて暖かな感じを与えていた。

それでも明け方はまだ冷えるものだ。僕はコーヒー缶を捨てると、

カワサキに向かつて歩

きはじめた。それからリヤに積んだ防水バッグから長袖Tシャツを取り出しジャケットの下に着込んだ。その他に防水バッグに入っていたものと言えば、下

着と靴下だけだった。

それからタンクバッグには地図の他にはサングラスと煙草が入っている位で、まるで散歩にでも行くような荷物だった。琵琶湖へ行くだけなら、その位で大丈夫だからだ。

僕はエンジンを始動しSAの敷地をゆっくりと走りながら、簡単にカワサキの調子を見た。

それから大きく旋回するとランプへ向きを変えた。ヘルメットのシールドを下ろしスロットルを開けると、カワサキはまだ冷たい空気を切り裂きながら本線へ向かつて加速をはじめた。

途中のパーキングで朝飯を食つていたりしたら、すっかり夜が明けた。僕は右手に朝日を見ながらひたすら北上を続けた。

僕はひとりで走るときは地図などほとんど見ない。めんどくさいからだ。適当に北とか南とかに向けて走るだけだ。しかし、その日はそうは行かなかつた。プランなどおりに彼女を迎えるに行かなければならなかつた。彼女が遅れるのはいいが、僕が遅れたら面白が立たないと思つた。まあそれでもその日は比較的に時間は余裕があつただろう。

朝の日差しがまぶしい北陸道を走つていると、賤ヶ岳SA2kmの標識が見えた。僕はゆ

つくりとスロットルを戻した。カワサキの速度は見る見る落ちた。約束の時間にはあと15分あるから遅れずには済みそうだ。しかしどんな子なんだろう。

僕はわずかに緊張していた。

やがて1kmの標識が見えた。僕は左足でギヤを落とし、さらに速度を絞った。優しそう

な子なのは電話したからわかつている。かわいい子だつたらいいなあ。

そんなことを思いながら、僕はワインカスイッチを操作し減速レンジへ入った。

まだ来てないかもしない。彼女は初心者なのだ。案外時間がかかる、僕はここでしば

らく待つことになるのがおちだらう。今から緊張していくもしかたない。

カワサキを止めて「コーヒーでも飲んで、気長に彼女を待つてやる」と思った。

僕はさりげ尼ヤを落とし、SAの敷地へ乗り込んだ。

するとエリアの建物の前の一輪駐車スペースにヤマハの小型車が止まっているのが見えた。

彼女から聞いていた車種で、赤と白の色も同じだ。リヤには大きな荷物をめいっぱいに積

んでいて、その後ろの歩道と駐車スペースとの段に女の子が座っている。赤いライディン

グジャケットの彼女は、カワサキの音に気がついてこちらを見た。

あの子だろうか、あの

子に間違いない。僕は彼女のヤマハの隣にカワサキを静かに止めた。彼女はゆっくり立ち

上がり僕を見た。それから僕はヘルメットを取ると彼女のほうに歩いていった。

「川島さん？」

「はい。」

「つかれたんちやうつおつかれさまあ。」

僕は笑顔を見せると言った。

身長は低いほうだろうか、最初にいちばん思ったのは、髪の毛のきれいな子だなと思った

事だろう。童顔で笑顔のかわいい子だった。きめの細かい白い肌が眩しい子だった。ごわ

ごわの真新しいライディングジャケットを着てはいたが、肩や背中のなだらかな線が女の子らしさを漂わせていた。おおよそ僕が知っているチームの武骨なお姉ちゃん方とは違う、かわいらしい人形のような子だった。

「だいじょうぶ。」

彼女はぽっぢやりとした頬に笑窪を作つてそう答えた。

「怖くなかった？」僕が笑いながら聞くと、

「ちょっと怖かったかなあ。」と答えた。

僕は笑いながら無事に来れてよかつたと言つた。

僕は彼女のヤマハ眺めながら、「これかあ、いいのみつけたなあと言つた。

僕がしゃがんでエンジンを見ていると、彼女はさつきと同じようчикーブーツを前に投げ出して低い段に座つて僕の様子を見ていた。僅かに開かれた両足と、しつかりと閉じられた膝、ジーンズを盛り上げるよつにカーブを描く肉付きのいい太股の形が、彼女の女らしさを強調していた。僕はかわいい子だなど内心思つてた。ヤマハのエンジンなどほとんど見ていなかつただろう。

僕は地図を彼女に見せると、プランを説明した。まず木之本で高速

を降り、今日は湖東か

ら彦根、近江八幡へ出て予約してある旅館へ行く。明日は大津から

湖西へ。湖を縦断して

木之本へ戻ると言った。

彼女は「はい。」と可愛らしい笑顔で答えた。まあ、バイクが似合う子とは言えない子だ

つたろう。ひとつかどころか、料理でもしていたほうが似合つたかも知れない。

今日のコースは50キロほどで250ccの足でも観光しながら充分に周れる距離設定だった。

「飛ばさないから、ちゃんとついておいで。」

僕が優しくそういうと彼女はまた笑顔を見せて頷いた。

カワサキのエンジンを始動するといつもの排気音が、朝の日差しの中に響き渡った。それ

からやや遅れてヤマハの甲高いエンジン音が重なった。

僕は出発準備をし、ミラーを見た。彼女は両足のつま先でなんとかヤマハの車体を支えて

いた。しかし、女の子っていうのは石川からここまで来るくらいなのに、どうしてあんな

に荷物を積んでくるんだろう。

きっと着替えや、シャンプーにリンスに、ペットの猫まで積んでやしないだろうな、と思うと可笑しくて笑ってしまった。

彼女は車体を支えているのが大変そうなので、僕は右手を揚げ軽く合図すると、さつと走りだした。彼女もがくんと車体を揺らし、エンスト寸前でなんと

か走り始めた。

高速道路を走るとき難いのは、合流だらう。バイクのためにわざわざレーンを譲つてくれれる車はない。しかもここは大型のトラックも多い。僕ひとりならどうとこうともないのだが、彼女は上手くやつてくれるだらうか。カワサキとヤマハの距離はだいたい 25 メートル位だった。僕が先に合流すると、彼女もミラーを見て上手く合流した。ほっとしたのは彼女ではなく僕のほうだっただろひ。まあ、能登からこまで来たのだから大丈夫だろうと思ったのだが。

僕は走行レーンの右寄りを走り始めると、左ミラーに彼女が映った。僕はスロットルを時速 80 km ちようどに調整した。

彼女はまだ怖いのか、背筋を伸ばして体を硬くしていようが、そうそう、それでいい。バイクが怖いと思つてこむちは事故はしないものだ。木々の縁が後ろへ流れていつた。三ヶ月ほど前までは雪が降つて殺風景だつた景色も梅が咲いて桜が咲いて、そして若葉の季節を迎えていた。萌える縁と、アスファルトのグレーの中で、彼女の赤いヤマハはとりわけ鮮やかだつた。まるで広い川を一生懸命に泳ぐ小僧な金魚のように見えた。日が昇り暖かくなりはじめた空氣の中を 2 台は走つていた。

木之本出口を降りて少し走ると、田の前に琵琶湖が広がつた。グリーンと青の水は細波に時々朝の光をきらきらと反射させていた。そして広がる縁はもう近くまできている夏を思

わせるように湖岸に溢れ、まるでこの世のものとは思えない程美しいパノラマを展開していた。僕は湖周道路ぞいの公園でバイクを止め、彼女に休憩しようとした。

口も走つていらないだらうけれど、彼女は今朝まで数百キロを走つてきたのだ。今日はのんびり周ればいいと思つてもらいたかった。僕はジャケットを脱いで、

湖岸へ彼女を誘つた。

水と緑の匂いが僕等を包んでいた。静かな中、小鳥のさえずりと波の音だけが聞こえていた。

「広いやろ。でも海じゃないねん。」

そう言つと彼女は、風が気持ちいいと言つた。

湖面を渡る涼しい風は、日差しとエンジンの熱で汗ばんだシャツを乾かして涼しくしてくれていた。湖のほとりには葦や水辺の植物がしげり、数羽の鷺が小魚を探しているのか、

岩の上から水の中をじっと覗き込んだり、湖面を低く飛んでいるのが見えた。

彼女はしゃがみこんで指先を細波に触れていた。美しく透明な水底にはいろいろな色のきれいな丸い小石がたくさんあった。彼女はそのうちのひとつを見つけ手を伸ばしたのだろう。

う。水は彼女の白く細い指を優しく迎えているように穢やかで、可愛らしい指が動くたび

轍と光の輪が広がった。水面を走る煌きは彼女の髪やジャケットを通り抜けていくように、元通り抜けていくよう、まるで薄いガラスのように透明に見えた。

彼女は僕を見ると屈託のない笑顔を見せた。美しい光景だった。僕

はかつて、どこかでそ

んな光景を見たような気がして、ずっと彼女のことを知っているような不思議な感覚を覚

えた。僕はなにかしら怖くなつて、

「さあ、もう行こうか。」と言つた。

「うん。」

彼女は小さく頷いたけれど、彼女の心はある自然が作り出す美しい風景の中にあって、まだ僕の元へは戻つてきていよいようだった。

「来てよかつた。」ちいさな声で彼女が呟いた。その声はまるでさざなみのよつな、小鳥たちのさえずりのよつな、そんな静かで、そして安らかさをもたらす響きだった。

僕は彼女を見ていた。道路の側にある家の庭には、鮮やかなツツジの花が咲いていた。僕には日を覆うほど春の日の明るい緑や、鮮やかなピンクの花々が、能登からやってきた

彼女をまるで引き立てているように見えた。かわいい頬も笑窪も髪の毛一本一本まで全てが眩しかった。彼女が行くところ、暖かい風はそよいで、花は咲き、水はせせらいでいるように見えた。

長くバイクに乗っていても、あんなに美しさと幸福感を感じることについては初めてだつ

た。

さざなみ街道沿いには、道の駅や公園がいくつもあり、僕等はいい景色を見つければバイクを止め湖岸に出た。そして草の上に座つこんでたくさん話をした。彼女は僕をイメージ

してたとおりだと言つた。僕はこうと、彼女のことをもつと垢抜けなくてどんな子

なのだと思っていた。実際、教習所で免許を取るのに大苦戦したらしく、ヤマハを買ってからも支えられなくて、ショットカブ125を返してしまったメールには書いていた。だ

から、能登からの道のりをこじらん心配していたのは僕だつただろう。しかし運転も心配したほどではない。そして思つていたより遙かに、見かけも性格も可愛い子だと思つていた。

「まあ、イメージどおりかなあ。もつとどんな子かと思つた。」

僕がそう言つと、彼女は僕を見つめて笑い、「ちゃんと運転できる?」と聞いた。

「まあ、いいや。」僕はそう答えて笑つた。

「しかし、能登からよくここまで来たな。」

能登から琵琶湖までは遠い。僕はメールで遠すぎる」と書いたのだが、彼女は行きたいと言つた。僕は地図を見て細かくチェックポイントを設定し、前日よく寝ておくこと、速度は

80キロ以上出さないこと、そしてもしチェックポイントを大きく

遅れたら、次のPAかSAで止まることを約束させた。もし彼女がたどり着けないと僕は

がそこまで迎えに行くことにしていたのだ。
携帯電話で連絡し、僕なんとか加賀か福井あたりまでたどりついてくれたら、あのあたりに僕が知つてている宿が

3ヶ所くらいはある。そこで泊を入れて、一日遅れで琵琶湖へ行けばいいと思っていた。

しかし、彼女は上手くポイントをくぐつて遅れずに来た。大したも

のだと思つた。しかし

さすがに疲れているのだろう。彼女は「ちよつと疲れたかな。」と言つた。

空はよく晴れわたり、木々はそよかぜにざわざわと音を立てていた。

僕の手元にある草た

ちも、過ぎ行く季節を楽しむように小さな小さな白い花をたくさん咲かせていた。小鳥が

僕等の周りを飛び回り、湖はそんな木々や花や鳥や、そして僕等を見守るようになにこいま

でも雄大に水をたたえ、ちいさな波の音をたてていた。

「ありがとう。」彼女は膝を抱え水面を見つめながら言つた。
突然礼を言われて少しあわてたが、「どういたしまして。」と答えた。それから、

「天気もいいしよかつた。来週からはまた雨らしいで。」

「まあ、雨も降らなあかんしなあ。雨がぜんぜん降らないときは、この湖の水も減るんや

で。緑にも水は必要やしなあ。でも美雪が帰るまではいい天気が続くからだいじょうぶや。」

そういうと彼女は嬉しそうに「うん。」と答えた。

ツーリングの日に雨と雪は本当にまいりてしまつ。はつきり言つて、なぜこんなものに乗

るのか正直僕にも解らないときもある。晴れ渡つた空の下を好き勝手走つている時はいい

けれど、時として雨に降られて、暑さに泣いて、寒さに震えて。実際仕事でもしていたほ

うが楽だつたと思つときもある。でもしかし自然に帰るといつ意味では良い乗り物だろつ
か。まあ、これに勝るものはないだらつと想つ。きっと彼女もそれに惹かれ乗つっていたに違ひないだろう。

彼女はまるで音楽でも聴くようにいつまでも細波に耳を傾けていた。僕はこの子にとっていい思い出を作つてやりたいと思つた。

彦根からは彼女が前、僕は後ろを走つた。前のほうが彼女は自由に走れるし、前を走らせた方が僕もミラーで見る必要がない分フォローしやすいといつメリットもある。しばらく走つた頃、僕は脇道から街道へ軽自動車が出ようとしているのに気づいた。建物の角からちらつと見えたのだ。彼女があまりに車線の左寄りを走つているので、あの軽自動車は彼女に気づいていない。彼女も軽自動車に気づいていない。軽自動車のバンパーが動いた瞬間、僕はカワサキのホーンボタンを力いっぱいに押した。軽自動車はがくんと止まつた。

彼女は一瞬意味が解らないのかミラーで僕を見たが、軽自動車に気づいて車線の中央へ寄つた。

まったく、時に趣味を超えた危険な乗り物であるのも確かだ。僕は、天気が良いうちにちゃんと彼女を無事に能登まで返さなければいけないと思った。長い間乗つているといろいろなことを経験するものだ。僕はこれまでに大切な人をふたり失つている。

最初は数年前だつた。僕は、大型車ばかりが集まるチームに参加していた。がらの悪い連中が多かつたが、リーダーは温厚な人で、なにかと気を使つてくれて人間的にもいい人だつた。ただいちばんの飛ばし屋で、定期ランの日、大雨の峠でスリ

ツプダウンして僕の目

の前で死んだ。家族も仕事も全部捨てて。その後チームは解散し、それっきりだ。

我々バイク乗りは変わっていると思われても仕方がないだろう。いつも危険と隣り合わせなのだ。なぜ乗るのかと聞かれれば、やはりスピードやスリルが楽しいのだろう。しかし、いつか自分も取り返しのつかないことになるのではないかという恐怖感もある。自分に限つてそんなことはないとと思っていたときもあるが、実際目の前で事故を見るとそうとは言えなくなつた。

しかし危険だと解つっていてもやめられないものだ。バイクで走るというのは気持ちがいい。

それにバイク乗りは、一年のラソンの中で僅かしかない、あの日のよう

うな、季節が与えてくれる美しい瞬間を楽しめる人間たちなのだろう。

そしてあの子もまだ怖さを知らなかつたけれど、似た者同士のよつなものだつたのだろう。

ちょうど正午の頃には近江八幡市に入った。あちこち見て来ているので、まるで自転車で走つているようなペースだつた。

しかし、これ以上彼女を走らせるのは危ないかもしけないとつたので、まず昼飯を食べて、それから旅館へ行き、バイクを預けてあとは近江八幡を観光することにした。

土産物屋に寄ると彼女はちゃんと行つたといつ証拠だと書いて、両親に佃煮のパックやお

菓子を買い込んでいた。それから琵琶湖の小魚を放つた水槽を見た

り、郷土工芸品を見た

りした。土産物屋の上のフロアはレストランになつていて、そこでは昼飯を食べた。朝から何も食べてないらしく食欲は旺盛のようだった。それを見て安心した。

僕が、「もうあとほんの少しで着くからだいじょうぶやで。」といふと、彼女は頬をつぶすらと染めて「やさしいんですね。」と言つた。

近江八幡の旅館は湖周道路から大きく外れ、8号線からさらに外れたところにある。旅館

というよりは民宿なのが、あるきっかけでここに主人と知り合いになり、それからは、夏になると避暑のために来る。ここも暑いのだけれど湖がある分、神戸や大阪よりは涼しく感じるからだった。

いつものように奥さんが出てくると、「いらっしゃい、早いお着きですね。」と言つた。

僕は、「いや、これからまだ観光なんです。」と言い、バイクを預かって欲しいと言つた。

僕は彼女のバイクとカワサキの荷物を預けると、

「美雪は今日はたくさん運転したからもうバイクは置いとき。でも交通の便がいまいち悪

いから、俺のカワサキで行こう。後ろに乗り。」と言つた。彼女は自分もバイクで行きた

いというかな、と思ったが素直にカワサキの後ろに乗つた。そして「後ろに乗るのはじめて。」と言つた。

僕は彼女が怖がらないように静かにクラッチをつなぎ、ゆっくりと走りはじめた。

近江八幡は水郷として有名なところだから、水路を小さな船でぐる「水郷めぐり」の話

をすると、彼女は行つてみたいと言つた。

彼女はやつてきたちいさなボート位の船に少しづくくりしたみたいだつたが、乗り込ませ

ると揺れる船にきやつきやきやつきや言つて面白がつた。

僕は彼女の後ろに座り、ジャケットを脱いでTシャツだけになつた彼女の、やわらかな腹

に手をまわして優しく抱いてやつた。嫌がらないいかと氣を使つ

たが、彼女はむしろ僕

に甘えるように身を寄せていた。

何人かの人気が乗り込むと船の喫水が上がり、安定した。彼女は楽しそうに手を水に浸け、

水草に触わつてみたりしていた。僕もレザーグラブで蒸れた手をつけてみると、暖かくて、

重い水の固まりが、淀んでいるように見えながらもゆっくりと指の間を流れてゆき、心地

良かつた。きっと今は蛙や魚たちも気持ちがいいんだろうなと思つた。僕は一の腕まで水

につつこんで水中に何かないかさがしてみた。彼女は遠くに布袋葵

が浮かんでいるのを見つけて腕をのばした。しかし届かないでの、僕は身を乗り出してそれを取つてやつた。船

はそのせいで僕の方へ傾き、他の乗客が僕の方を見た。彼女は布袋葵を手に取つてしまはくめずらしそうに見つめ、そつと水の上に返した。

船頭が櫂を動かしはじめると船は静かに進みはじめ、彼女の布袋葵は船の後ろへ流れていつた。

彼女はまるで子供のように水面を楽しそうに見つめていた。

光は水面をゆらゆらと輝かせて、彼女の茶色の髪や白い頬をマリマリ
ボールのように照らし出していた。

春の水と土の匂いは、遠い道のりを走ってきて疲れた彼女を安心させ、眠気に誘つていつ

た。そしてやさしく抱いてくれる僕にも安心したのだろう。水面を見つめながら、

「なんだか気持ちよくて眠くなつてきた。」と言つた。

彼女の睫毛が揺れて、そして半分ほど閉じようとしていた。

僕はやわしく彼女をぎゅっと抱きしめると、「ええで、寝とれ。」

と言つた。

彼女はまるでおだやかな口調で、「夢の中にいるみたい。」と言つた。

「そうやな。静かやな。」

僕が言うと彼女は指先を水面に触れながら、「ずっとこうしていいたい。」と言つた。

船は葦が生い茂る狭い水路をゆっくりと進んでいった。

水底までは見えなかつたが、水中を水草や、まるで水晶のような酸素の泡が流れ行つた。

緑の茂みからは野鳥のさえずりが聞こえ、水は流れ、それに合せるように時間もゆっくり

と流れていった。彼女の指先を包むように水は穏やかに波紋を作り、そして流れていった。

僕はそつと顔を彼女に近づけた。僕の脣が彼女の髪に触れるときわやかなやさしい香と彼

女の汗の香りが漂つた。そしてそれに気づいたのか、彼女の耳は赤く染まつた。そして船

縁を置いた僕の手を取り、頬を僕の腕に乗せた。肌が触れ合い、彼女の柔らかな感触が僕

の腕に伝わつた。彼女の美しい頬は染まり、熱がまるで僕を焦がす

かのように伝わっていくのを感じた。

どこも緑と水に満ちていた。美しい、そして短い季節だつただろう。

船から下りて船屋の兄さんに写真を頼むと、僕は彼女の肩を抱いてみた。

彼女は僕の気持ちが解かったのか、抱かれるままそっと寄り添つて僕の肩に頬を乗せた。

近江八幡の町並みを案内してやる間じゅう、彼女の顔は嬉しそうな笑顔に溢れていた。そ

してときどき僕の腕に甘えてすがり付くようになった。それに僕もたくさん笑つた。まあ

一曰で恋に落ちひつてこうのはあいうことを言つただろう。

宿への帰り道、僕は少しさぞなみ街道へ遠回りをしてやつた。夕陽が湖の水をオレンジ色

に染め、ときおり葦の茂る浅瀬から飛び経つサギの黒い陰が見えた。まだほんの少し明る

い西の空が反射して水面はきらきらと光のかけらを放つていた。ぼくはスロットルを絞り、ゆっくりと走つて彼女によく見せてやつた。彼女は僕の背中に

ヘルメットを押し付け、それを見ていた。その時、聞こえるはずもないのに、彼女の小さ

な声が「ありがとう」と言つた気がした。

僕はヘルメットのシールドを上げ、エンジンの音に負けないようこ

大声で、「明日も良い

天気そうやな。」と言つて笑つた。すると彼女も「うん。」と答えた。

旅館から歩いていけるほどの距離のところに自然公園がある。残念ながら公園から湖は遠くて見えないのだけれど、たくさんの木々と草花が植えられていてきれいなところだ。

僕は夕食のあと風呂に入り、それから彼女を誘つて出掛けた。つづじや菜の花が一面に咲いていた。それらは月に照らされて、昼間とは違う深い色彩を魅せていた。僕は木のベンチに座ると、ビールの缶を出し勢い良く開けた。振り回してきたせいで泡が吹き出し、彼女はそれを見て笑った。彼女の分も開けてやり、遠い道のりをよく来たね。といつて乾杯した。空には月がかかっていた。

「月夜やなあ。」

僕が言うと彼女も空を見上げて頷いた。

「俺は遠くにツーリングに出かけたら月を見て、たとえばあの月が満月になつたら帰ろうって思うで。こいつって空を眺めるのが好きやなあ」

そう言うと彼女は僕のどうでもいいような話をうつとつと聞きながら、空を見上げ僕に甘えるように身を寄せてきた。

いちめんの緑と花と土の香りと月明かりが彼女を包み込んでいた。時間はまるでそこだけがゆっくりと穏やかに流れているようと思えた。花々のやさしい香りが涼しい風に乗つてふたりの側を通り抜けていった。

別部屋で頼むと言つたら、三人泊まれそうな部屋を二つも用意している。あまり広すぎて

かえつて寝にくそつな氣もした。ここも暇なんだろう。もつともここに民宿旅館があるなんて知ってる人も少ないのでと思つた。

僕は冗談のつもりで、彼女に「眠れなかつたら遊びに来てもいいで。」と言い、冷蔵庫から瓶ビールを出して部屋に持つて上がると、ガラスのコップにとくとくと注いだ。部屋からも刃が見えた。

しばらくして、誰かが戸を叩くので開けてみると、彼女が浴衣に着替えて來た。僕はたいそう慌てたが、冷静に「まあ、入り。」と言つた。しばらくいろいろな話をして夜が更けた。

「まだ眠たくないんか？」

僕が聞くと彼女は、

「もうちょっと起きてる。」と言つた。

そして僕のビールのコップを両手の細い指先で包むように持つと、「ぐぐじくと飲んだ。」彼

女の白い頬も浴衣から見え隠れする胸元も、みるみるうちに桜色に染まり、浴衣がはだけ

て首筋と細い肩が、白い蛍光燈の明かりの下で見え隠れした。

彼女はそのまま布団の上にうつぶせになつた。僕は「今日はたくさん走つて疲れたやろ。

肩でも揉んでやろうか?」と言つた。

彼女は「うん。」と言つので、肩を揉んでやつた。それから背中も太股も揉んでやつた。

彼女のやわらかな体の感触が指先に伝わつた。僕の指が彼女の尻に触れると彼女の唇からちいさな喘ぎが漏れた。僕は衝動的に彼女を仰向けにすると、彼女の髪に指を通し、唇を彼女の唇に重ねようと近づけた。

彼女はちいさな声で「いや」と言ひて横を向いた。僕は強く掴んだ彼女の腕をそつと離してやつた。彼女は向き直つて僕の目を見つめた。僕は彼女の瞳の奥の、まるで夜空のよう

な深さの中に彼女の限りない愛情を感じた。彼女は静かに目を閉じた。僕は彼女の浴衣をはだけると柔らかな肩を掴んで優しく唇を重ねた。そして彼女の熱く上気した体を抱いた。

全てが終わつたとき、疲れきつた彼女の中にはもう僅かな体力も残つていなかつただろう。そして安心したのだらう。僕の胸に顔を埋め、深い眠りに落ちていった。

明ぐる日、僕等は遅くまで寝て、結局エンジンを始動させたのは10時をまわつていた。

それからさざなみ街道を南へ走り、大津から湖西へ抜けて近くの公園へ行き、クローバー

の絨毯の上で弁当を食べた。彼女は土の香りが素敵だといった。僕はごろんと横になると、まぶしい青空を見つめながら聞いた。「能登はどんなところなん?」

彼女は自分が生まれ育つたところを細かく話してきかせた。

僕は彼女の話を聞きながら能登の風景を想像していた。真っ青な日本海、白い砂浜、水田

を渡る風。きっと美しい自然に溢れたところなのだろう。そしてまたかわいい彼女に会いたいと思つた。もうすぐ別れなければならぬのは淋しかつた。

「ええなあ、夏になつたら、次は俺が能登までいくわ。」

そういうと彼女は嬉しそうに、

「うん、おいで。」と言つた。

「遠距離恋愛やけど淋しくない?」

僕が聞くと彼女は手に取ったクローバーの白い花を見つめながら、「うん・・・」と言った。やはり少しをみしそうに見えただろうか。僕は彼女の肩を抱くと、

「またすぐに会えるで。」と言った。

大津から北上し、高月町に入つたところで、バイクを止めた。

「もうすぐ琵琶湖とお別れやで。」

そういうと彼女は、淋しそうな表情を見せて

「うん。」と言った。

水は彼女の気持ちを察するかのように、穏やかに、そして優しい音を立てていた。

彼女にとって湖は、きっともうひとつの故郷でもあったのだ。あの美しい緑と澄み渡つた水は彼女を受入れ、そしてひとつになつた。あの子はあるでの日の湖のように美しい、そして優しい心を持つた子だつた。

その後、僕等は木之本から北陸道へ入り、僕は予定どおり福井に予約しておいた宿まで彼女を送つた。

僕も福井に泊まりたかったのだが、翌日から仕事があったのでやむを得なかつた。

別れ際、宿の前で彼女は僕のジャケットの袖を握つてうつむいた。僕はグラブを外すと、

彼女の頭を自分の胸に押し付けるようにして抱いてやつた。彼女の瞳から涙が零れた。

涙は僕の撥水ジャケットの上を転がり、澄んだガラスの玉のようにならきらとすべり落ちていった。僕も別れを惜しむように彼女のかわいい頬に手を当て、

指先で彼女の涙に触れ

てみた。暖かい水の粒が僕の指に流れた。彼女の気持ちがたくさん込められた暖かい水だつた。

「大好きや。」僕は彼女を抱く腕に力を込めて言った。
彼女は僕の胸に顔を埋め、頷いた。そして
「楽しい思い出をありがとう。」と言った。

彼女はまた泣きながら手を振った。別れるのが辛いのは僕も同じだつたろう。僕はカワサキを旋回させながら、彼女に軽く手を振った。

そして、ヘルメットの中で小さく「また会おうな。」と言った。
後輪に駆動が伝わると彼女の姿は、バックミラーの中に吸い込まれるようにな小さくなつた。

僕は暗い北陸道を自宅へ向けて走つた。カワサキは月明かりをめいづぱい受けながら、まるで鳥のように夜風に乗つて走つた。タイヤはアスファルトを蹴り、景色は流れた。そのたび彼女との距離が離れると寂しかつたが、でもそれでよかつたのだと思つた。楽しい思い出を作つてやれた。そして僕もバイク乗りをやつしていくんなに楽しいことはめつたに無いだろうと思つた。

次は能登へ行こう。青い海、どこまでも続く北陸道、そしてかわいいあの子。明日は同僚

たちにさんざん自慢してやる。夏まであつという間だと思つた。エギゾーストノートは闇を切り裂いて高速のオレンジ色の照明は、青く塗装されたカワサ

キのタンクを紫色に染めながら、いくつもいくつも流れていつた。

晴れ渡つた空に月はか

かり、遠くから僕等を見つめていただろ。

その年の夏のことだった。それまで僕等はメールと電話で夏の能登ツーリングの予定を話したりしていたが、長梅雨と工場の予定が合わずなかなかプランが決まらずにいた。

ある日、いつものように彼女の携帯電話にかけてみた。ところがなかなか出ないのでしばらくながら待つていると、彼女のお母さんが出た。僕が挨拶して彼女に代わって欲しいというと、

「琵琶湖に連れて行ってくれた人ですね。」と言った。

「はい。」

僕はどうしても彼女の携帯電話でお母さんが出るのか解からなかつたが、しばらく間を置いて、美雪はバイク事故で死んだ、と言つた。

僕は思わず氣が遠くなるのを感じた。なにを言つてるんだと思った。先日雨が降りしきる日、ひとりでもうこりど琵琶湖へ行くのだと言つて家を出て、北陸道

の金沢を少し過ぎたあたりでトレーラーに巻き込まれたのだと言つた。

それから僕は工場を休み、そんな馬鹿なことがあるものかと自分に言い聞かせながら雷鳥で能登まで行つた。

そして彼女に会つた。彼女はかわいい人形のように花に囲まれていた。まるで微笑んでいた。

るようだつた。もうあの笑顔を見せて僕の腕に甘えてくれないのかと思つと涙が溢れ、泣いて泣いていろいろ迷惑もかけてしまった。僕のせいですと嘆かべり、

彼女の両親はあなたのせいじゃない。あの子が好きだから。と言つた。

それからじばらくはなにもできず休職していた。

なにもできず酒ばかり飲んでいただろう。カワサキも置きっぱなしにしてあつた。

僕は大切な人をふたり無くしている。

最初は数年前、定期ランの日だった。そう、大雨の降る峠道でのことだった。

少し飛ばしすぎだろう。そう思ひながら先頭を走るリーダーについて行つた。水飛沫が舞

い上がり、ヘルメットのシールドは雨水が張り付いてもう十メートル先も見えないほどつ

だつた。グラブもジャケットも浸水していた。目的地の展望台まではもうあと3キロほど

だつた。僕は一番手を走つていたが、リヤが左右に振れだしていつスリップダウンしても

おかしくない状態だつた。

だめだ。もうついていけない。そう思つた矢先だつた。緩い下りの右カーブを立ちあがつ

たところで、僕の視界をまるでスキーのように彼の黒い車体が滑つて行くのが見えた。

そして彼のバイクはガードレールに鈍い音立ててぶつかり、さらに激しく回転して部品

を巻き散らかしながら側の畠の中へ落ちた。

彼は衝撃で捻じ曲がったガードレールの手前に倒れていた。レールに激突したときに飛ばされたらしかつた。

頭からも腕からもおびただしい血が雨水の中へ流れていった。ヘルメットすら脱がすことができない状況だつた。彼はまだ少し震えるように動いていたよう心思うが、その後はまつ

たく動かなくなつた。後続のメンバーが到着するとその状況を見て
皆震え上がつてしまつ

ていた。僕も動転していたが、ジャケットを脱いで傷口を押さえな
がら声をかけ続けた。

やがて救急車が来て、救急隊員は慌しく応急処置をしていたが、や
がて動きが静かになり、

隊員のひとりがズブ濡れの僕の肩をやさしく叩いた。僕は「どうし
て、」と食つてかかる

うとしたが言葉が出ず、代わりに涙が溢れた。

その時彼がどんなミスをしたのか、なぜあんなことになつたのか今
はもう解らない。ただ、

あそこは彼が若い頃から何度も走りに行き、そしてこよなく愛した
美しいコースだった。

「おまえなら解かるだろ?」そんな声が聞こえるよつな気がする。
きっと今も大好きだ
つたあの道を走っているに違ひない。

そしてふたり目は美しい湖を愛したあの子だ。きっと彼女はあの日
へ帰つて行つたのだろう

う。そう、あの日の美しい自然の中へ帰つていつたのだろう。そし
て今も、走つているに
ちがいない。そばには優しい僕がいて。あの美しい思い出の中に帰
つて行つたのだろう。

澄み渡る春の水と緑と風と太陽と・・・。
さぞかし痛かつたことだろう、苦しかつたことだろう。今こうやって
て思えば涙しかない。

僕が代わりになれたらいと何度も思った。

なぜひとりで来ようとしたのか。両親も将来も何もかも捨て
てあの子は逝つてしまつた。湖を愛して、バイクを愛して、そして僕を愛して逝つてしま

つた。

バイク乗りはいつか自分の帰るところを見つけるのかもしれない。
彼女にとつてはあの日の思い出がそうだったのだろうか。

いちめん花と水と木々の眩しい緑の中で、僕に笑顔を見せる彼女の姿を今も思い出す。かわいい笑顔を作つて、僕の腕にすがりついてはしゃべ姿はなんて生き生きとしていただろ

う。彼女と共に過ごせたのはほんの数十時間時間だった。しかし、その間に僕等はまるで短い季節を惜しむかのように確かに生きていた。

月は満ちて、そして欠けてゆく。もうあの日も彼女も戻らない。

僕は月を見ていた。夜勤も半分ほど過ぎた。工場の大きなガラス窓の外には雲ひとつない
空にあの日と同じように満月が掛かっていた。僕は月を見るたびあの日の事を思いだした。

「また会おうって言ったやん。」

そう呟いてみると止め処もなく涙が溢れ、もうビックリしようもなかつた。僕は、作業着の袖

で涙をぬぐうと、明かりの消えた休憩室への廊下を歩いていった。

あとがき

ここまで読んでくれてありがとうございます
ここまでは前に書いたものなのですが、どうも詰めが甘くて上手く書けないなあ。

まあ、ある程度現実にあったことを作文みたく順番に並べて書いてるという気もします。

* * * * *

第2部 序章

アスファルトから湧き上がる熱気を受けて僕は日本海沿いの国道を金沢へ向かつて走つていた。

太陽の光は容赦なく照り付け、フラッシュライトのようにいたるところで反射して、僕のヘルメットシールドの中まで入り込んできた。僕は大きくため息をつくと流れる視界に目を凝らしていた。昨日まで降っていた雨はやんと空は一転して青さを取り戻した。彼女が逝去してから一年目の夏のことだった。僕はあれからなにしていただろうか。彼女の訃報を聞いてからはまるで鉛の中に閉じ込められたような、そんな苦痛の中にいた。

僕はずっと人が生きる意味について考えていた。彼女の人生とはいつたになんだったのだろう。バイクにさえ乗らなければ、彼女は今もある輝くような笑顔を見せてくれたにちがいない。しかしバイクに乗らなければ僕と知り合つこともなかつただろう。

人は過ぎ去つた時を自分勝手に解釈するものかもしれない。今思えば彼女はある日、あのとき、まるで美しく輝いていた。残り少ない彼女の人生が燃え上がつ瞬間だつたのかもしれない。それにしても短い人生だと思う。まだ結婚もして、子供も作りたかっただろう。

彼女の生きた意味とは何だったのだろう。を考えると僕はもう

泣くしかなかった。

僕は能登へ行こうと思つた。彼女が短い人生を過ぎ去った場所を走つてみたかった。そして、

そうすれば彼女に会えるような気がしていた。

日本海は宝石のような青さに満ちていた。まるで透き通るような青さに僕は驚きながら、

逃げ水の湧き上がる国道を北へ向けて走つていた。

いつもならまるで小学生のように真っ黒になつても元気な僕なのだけれど、その時はまだ

辛かつたのだろう、肌を焼く日差しがなにかしら痛く感じていた。

それでも一年ぶりに整

備されて田舎めたカワサキは、まるでカモメのよう、海上から吹く風に乗つて北へ走つ

ていた。

彼女がいてくれたらどんなに楽しい旅だろうと思つた。僕はバックミラーで後方を見た。

あの日のように後ろを走る彼女の姿を見ていたらどんなにいいだろう。しかしもうミラーに映るのは過ぎ去つた道でしかない。あの日の思い出も遠く遠く小さくなつてゆく。

僕は何を求めて何を探そうとひただろう。

第2部本編へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0744a/>

雨がやむとき

2010年10月16日02時28分発行